

自蹊庵便り

令和八年 瞳月

NO 178

茶事折々 「茶事昔仕事・今仕事」

今年も夜咄の茶事、京都三日間、千葉三日間、怪我も、たいした粗相もなく、無事に終えることができました。これも偏に水屋方・台所方の皆様の日頃の精進あつてのこと。

誠に感謝の日々にござります。

薄暗い蠟燭の灯だけの世界、眼を馴らすためにも、台所も水屋もスマートライトの中での作業をして頂いております。

す。今頃の夜は不夜城の如く、明る過ぎるよう思つております。ゆえに、午後五時頃からは電気をスマートスライドにしたり、蠟燭の明かりに近づける工夫をしております。不思議とうす暗い中での働きは、台所の配膳の準備なども物静かに丁寧なふるまいにも繋がるようございます。不思議な副産物です。

そういえば、道具の拝見も蠟燭の光ですと、一段と美しく、吾がしがない道具も千両役者

のような働きをしてくれるから不思議です。陰陽の働きいざこにも有り…と、実感させられるこの度の夜咄にございました。

夜咄は仕上げの茶事と云われ、なかなか繁雑この上ないことになりかねないと思われがちですが、足元火鉢のわら灰作りも、皆さんで楽しみ、一本一本火鉢に整えている姿、時間、全てが尊く、かけがえのない時間のように思われ、時間の一齣一齣がいとおしく、限られた命の明日を信じ、肩を寄せ合い、心を一つに茶事を整えていく皆様の時間は誠に誠に尊いことにござります。

皆様の働く姿は尊く、美しく、お客様は客冥利に尽き、亭主も冥利に尽きる、この上なく幸せな亭主にござります。…が、私自身は未だもなく、人々、良く心を惜しまず、集中力を絶やさず、優しい派動が終日流れている、いつの間にか茶事の理想郷がそこにはありました。

この先の願いは、お一人お一人、自信を持つてフロントに立つて活躍して欲しいと願つております。

あゝ、お茶という文化は何と深く、平等にお人を導いてくれるものか…と、老いというもの

二〇二五年もあと数日で終わります。これから二〇三〇年に向かつて、五年先の皆様を見てみたいものです。皆様それぞれおかれた条件、背景も違いますが、光を放つ側で活躍して欲しいと願つております。せつかくと申しますか、茶道に導かれ、日本文化のぎゅうと詰まつた欲張りなどもすれば底なしとも思える茶事から、御自分の身の丈に合った楽しい茶事模様を発信して欲しいと心から願つております。

は、心みなぎる頃、力衰えるという残酷な面もございますが、私自身の課題は料理にあつては昔仕事を伝えながら、今仕事に合つた働きを試み、茶事懐石をもつとシンプルに、季節の気になかつた足元の一掬いの茶事、今日のひと掬いの茶事模様の発信力に磨きをかけていきたいと願っております。

とは、云うものの、この度の夜咄も皆様の働きに比べ、私、亭主の働きは惨敗にございました。

利休さんの二～三人の世界ならいざ知らず、十名様の夜咄で前茶もあり、蠅燭の油煙で喉をやられないよう、障子や襖を少しづつ開けておりますと、空氣の流れで炭は早くおこり、湿し灰で充分コントロールしていたつもりでも、前茶はシュンシュンと湯がたぎつていなくてはならず、冬上夏下の美しい調えとのせめぎ合い、幾度場数をふめば満足の火相に出会えるのでございましょう。

いつだつたかわが師匠がお稽古の始まる前に半田に炉中の火をあげ、湿し灰を丁寧に全体にほつこり敷き詰めた美しさの意味が、今ようやく見えております。湿し灰の蒔きよ

の意味の深さが見えるのに三十年という歳月を費やして、ようようやくのことにつございます。

これらの意味と今に合つた人数さんの中でビタツと後座にたがるほど炭に整え、濃茶に挑戦するも炭を無駄遣いせず、一度火種の床を作つたらすべて火鉢の炭、煙草盆の炭も整え、蠅燭一つ火をつけたらその火種もまたしかり、物を始末し、大切に扱うことの慎ましさを学べるのも茶事の良さかと…。戦国時代から今日までの足跡の再現できる世界は案外茶事だけかもしません。

大切なことを沢山残してくれている茶の湯の世界、折々炭の粉を集め、蠅燭のすすを集め、煉り香に挑戦している自分がいます。

懷石の汁に用いるときの辛子一つにも、今はほうじ茶で練つてアグを柔らかくしてから味噌汁で程良い水辛子にする」とをお勧めしていますが、昔は湯呑みなどで練るときは必ず右廻りでしつかりと練り、その上から和紙を覆い、水を張つて炭火のかけらを落として、ジューシー音をさせ、繰り返しアグを抜く方法を教わつたものです。アクを取り除くためには灰や炭は必

需品でした。今でも本物の仕事にはかかせませんが…。水が蒸発して亡くなるまで繰り返しアグを抜き、水がなくなったら紙を取り除き、器ごと伏せて一時間ほど置き、味噌汁で柔らかくのばして水辛子を作つたものです。辛子を溶いた湯または水の量でさえ、その味を狂わすと教わった、そんなことを実行している板前さんもまだいてくれるのでしようか…? 昔々の物語になつてしまつたものの多くを今に残し伝えたい物、今の時代の工夫をしていく必然とも向かい合ながら、日の本一の茶の湯文化守つていきたいですね。

数えてみれば本年も八十回ほど茶事を滞りなく終えることができました。新しい年に向かってのささやかな挑戦です。

本年も沢山の出逢いと感動をありがとうございました。二〇二六年が皆様にとって穏やかな心豊かな年でありますようお祈り申上げ、今年の筆納めといたします。

多謝!!

令和七年師走吉日

～おろおろと茶事一筋に四十年